佛印の道路及自動車事情

清野謙六郎

道路事情

佛國領有以前に於ける印度支那には完備せる道路と稱し得るものは殆どなく、今日佛印に見る如き近代的道路網の發達は、佛人の努力によるものと云へる。英人が鐵道建設者であるに對し、佛人は道路建設者であると云はれる樣に、代々の佛印總督は道路建設に意を用ひ來つた結果、道路の發達は近年著しきものあり、比較的發達の遲れた鐵道を補ひ、國內統治上重要なる役割を果しつゝある。

工業らしい工業を殆ど有さぬ佛印に於て、海防港上濛々たる黑煙を吐く印度支那ポートランドセメント會社が、三十萬トンの自國需要を充たし、猶ほ十數萬トンの輸出を行つてゐる偉觀は、佛印政府が如何に道路政策に力を入れて來たかを象徵してゐると云へやう。

佛印に於て道路の最も早く發達を見たのは交趾支那であつて、他の印度支那聯邦諸國（東京、安南、カンボチヤ、ラオス）の道路の發達は之より遲れてゐる。之は佛國の印度支那統治の沿革から見て當然な事と云へやう。

（註、佛國が印度支那侵略に歩武を進めたのは十九世紀の中頃の事で、一八五九年サイゴンを占領し交趾支那の領有に成功したのを手初めに、カンボチヤ、安南、トンキンを巧みに保護國化し、一九〇四年にラオスを保護領化するに及んで、茲に印度支那は全く佛國の支配下に收められるに至つたのである。）

ラオスを保護領化するのに成功し、茲に印度支那全土を領有した佛國は、國內統治上聯邦各國を結びつける長距離道路の必要を感じ、一九一二年アルベール、サロー總督の代に至つて、初めて佛印全土を結びつける長距離道路建設計畫が樹立された。

此の計畫は一九一八年に實施に移り、他方之と平行して東京、カンボチヤに於ても地方道路の建設が迅速に進められたが、安南

ラオスの道路建設は之に伴はず、最近に至つて漸く建設が奬勵されてゐる狀況である。

佛印に於ける道路は、之を國道と地方道路に大別してゐるが、兩者を合した總延長は一九三九年九月末現在に於て三五、八九〇粁と報ぜられてゐる。その內、アスファルト道路、マカダム道路、土盛道路の延長の各州別分布狀態は次の如くである。

主要道路分布表（粁）

地域	アスファルト道路	マカダム道路	土盛道路
東京	一、二七五	二、六四五	一、八五四
安南	七八五	三、二〇〇	二、九六一
交趾支那	一、五八六	四、五六五	一、五六九
カンボチヤ	二、二四五	二、二四五	三七七
ラオス	一、四五五	一、四五五	一、五一五
計	七、三四六	一四、一一〇	八、二七六

（註、一九三九年九月末現在）

佛印道路網の大動脈をなせる國道の中、最も重要なるものは第一號國道（別名マンダリン道路卽ち官道）である、之は諒山附近の支那國境より海岸線に沿つて南下し、泰國境に達する延長約二千六百粁の大幹線で、その間佛印の重要都市たる河內、海防、西貢、プノムペン等を南北に連絡してゐる。全線アスファルト或は砂利、碎石鋪裝が完備し、幅員は六米、最大勾配百分の六、最小半徑十五米、橋梁は鐵筋コンクリートを用ひてゐる。

この第一號國道以外の國道の延長は、七千粁餘に及び、之も亦年中自動車交通可能であり、重要なる交通網を形成してゐる。

左に第一號國道以外の國道を地方別に別擧しやう。

東京、

河內海防間第五號國道（一〇三粁）、首都河內と河江を連絡する第二號國道（三四二粁）は行政上、軍事上、經濟上からも極めて重要な道路である。又、河內から、ホンゲイを經て、チエンエンに至る第十八號國道（一九〇粁）は全線石敷道路である。なほ一九三五年に入つてから海防と南定間に直線道路八六粁が開通した。

東京――ラオス

國道第四號はモンカイより支那國境に沿つて西北に進み、萊州より南下してラオスに入り、ルアンプラバンを經てヴイエンチヤンに達してゐる。其の延長は千五百粁を算する。

安南――ラオス

國道第七號、第八號、第九號は何れも安南海岸から安南山脈を東西に橫斷してメコン河流域に達する道路である。第七號國道は安南の首都順化よりドルオン、ムオンセオンを經てラオスのルアンプラバンに達するもので、その延長は五一一粁、第八號國道は同じく順化からナベ峠を經てヴイエンチヤンに達するものである

が、乾季の他は交通困難を來す。第九號國道は延長(三六〇粁)ドンハとサヴアナケー間道路であるが、安南海岸とラオスのメーコン河流域との連絡に重要な意義を持つてゐる。

安南

安南の南部に於ける第十一號國道(一一〇粁)は、藩江、トールチヤム、ドラン、ラルブルブ、アイエ等を經てダラに達する道路である。第十二號國道(三〇〇粁)はダラからヂリン、ブラオ峠等を經て交趾支那の首都西貢に通じてゐる。

交趾支那

第十五號國道(九八粁)は西貢よりカブサンジヤクに、第十六號國道(三四六粁)は西貢よりカンボチヤのクラチエを經てメーコン河に沿つて北上し、ラオスのヴイエンチヤンに達する道路である。又、西貢よりロクニン、ダルラクを經て安南の海岸に達する第十四號國道(六六〇粁)がある。

カンボチヤ

第十七號國道は首都プノムペンから泰灣沿岸のカンポ及ハチエンに達するもので延長は二〇九粁である。又國道第一號の一(三六六粁)はトレンサブ即ち大湖の北方を迂回し、プノムペンよりシエレアプ、アンコール、シソクオン等を經由する。

佛印に於ける自動車保有量は、アメリカン、オートモビル誌の調査に依れば、一九四〇年末現在に於て、三〇、九一六臺(他にオートバク三、三二九臺)である。

然るに、佛印政府の發表に依る一九三七年六月末現在臺數は一七、二〇五臺で、前記アメリカン、オートモビル誌の調査臺數に比較して僅か三ケ年の開きにしては懸隔が甚だしすぎ、何れを眞なりとすべきや苦しむ。

恐らく、佛印自動車行政のルーズな處から、登錄に洩れた車輛數は相當に多く、米國側の調査せるものゝ方が寧ろ眞に近いのではないかと思へる。

然し、茲では一應佛印政府發表の統計に依つてみやう。

佛印當局發表に依れば、一九三七年六月現在に於て、各車種別臺數は次の如くである。

乘用車	一三、六〇〇
バス	一、七五〇
トラック	一、五五〇
トラクター	三〇五
計	一七、二〇五

右統計を見て目立つ事は乘用車の著しく多く、トラックの少い點である。即ち、乘用車の數は約八割の多きを占めてゐるに對しトラックはバスよりも少く、一割にも滿たぬ、之は日滿支に於け

る自動車保有形態と全く逆で、國防的にも産業開發的にも脆弱性を示してゐる。

而して、之等の自動車の大部分が個人用であつた事も、我國と全く異つた現象を示してゐる。

之は所有者別自動車臺數の内譯を見れば明瞭である。

所有者		乘用車	バス及トラック	トラクター	計
王室、官廳		五三〇	二九〇	四〇	八六〇
自動車業者	新車	二〇〇	四〇	三	二四三
	舊車	四五〇	一五〇	八	六〇八
會社、公共團體		四七〇	三四〇	一五〇	九五九
個人	歐米人	四、九〇〇	二八〇	六五	五、二四五
	土着民	六、八〇〇	二、一六〇	三〇	八、九九〇
	アジア人	二五〇	四〇	一〇	三〇〇
計		一三、六〇〇	三、三〇〇	三〇五	一七、二〇五

（註、一九三七年六月末現在）

右表にみるに、個人所有のものが絶對的に多く八五%の多きを占め、又その大半は乘用車である。

實臺數より見れば、土着民の所有數が一位を占めてゐるが、人口に比較する時は普及率は歐米人に比し著しく劣つてゐる。

即ち、土着民（安南人、カンボチヤ人、ラオス人等）の人口は二千萬を算るに對し、歐米人は四萬三千人を算るにすぎない。之

を自動車數に割當てると、土着民に於ては二千餘人に對し、僅か一臺であるに對し、歐米人（主として佛人）に於ては九人弱に一臺の高率を示してゐる。

斯樣にみると、佛印の自動車の發達は、主として佛人が通勤遊覽用として自動車を用ひた處から發したものであると云へやう。

次に分布狀況は、交趾支那の七、四二〇臺を一位とし、東京の五、〇八〇臺之に次ぎ、他は其の半數に達せざる狀況である。

數示すれば左の如くである。

（地域）	（臺數）
安南	二、二〇〇臺
カンボチヤ	二、一〇〇
交趾支那	七、四二〇
ラオス	三八五
東京	五、〇八〇
計	一七、二〇五

（註、一九三七年六月末現在）

交趾支那、東京に偏在してゐるのは、この地域に西貢、ショロン、河内、海防の四大都市を包含してゐるからと云へやう。之等の四大都市にカンボチヤ州のプノムペンを加へた五大都市の自動車數のみで、全領土の自動車數の四二%に當るものを保有してゐる。

註、西貢、ショロン、河内、海防、プノムペンに於ける自動車臺數は次の如くである。――一五三七年六月末現在

西貢及ショロン	三、三八〇臺
河内	二、三四〇
海防	七二〇
プノムペン	八八〇
計	七、三二〇

使用されてゐる自動車は大半は佛國製で、さすがの米國車も佛印に於ては餘り使用されてゐない、輸入車の約七割は佛國製であり、一割が其の他歐洲諸國製、米國製は二割位である。

比島は云ふ迄もなく、ジャワ、スマトラ、ビルマ、泰等何れに於ても米國車が壓倒的に多く使用せられてゐたに對し、佛印のみは米國車の進出を許さなかつたのは、關稅障壁を設け、自國車の保護政策を採つたからである。

元來、佛印は石油の資源を持たず、從來米國及び蘭印の石油に依存してゐたのであるが、ヴイーシー政府成立以來、石油入手の困難を來し、一九四一年四月以來石油消費規正を斷行してゐる。一方、木炭、薪等の代用燃料使用を奬勵し、燃料難を切り拔けつゝある。大體佛本國も石油に乏しく、早くから代用燃料の研究を行つて居り、代燃機の發達を來してゐたため、佛印に於ても代燃機の製造使用が行はれてゐる。

若葉吟社詠草（夏野、日射病の卷）

野營にて星の輝き夏野かな　翠山
ほの白う大杉遙けき夏野かな　玉葉
斃れ馬に兵伏し居れり日射病　同
戰場の思ひ出深し夏の野邊　靜如
夏の野邊葉末の露に月明けし　同
遠雷のとゞろく夏野急ぎけり　東邊僕
日射病何するものぞ强歩會　同
さやけくも夏野に晴れぬ朝の富士　蕗邨
叉銃して兵等憩へり夏野原　同
日射病の戰友勞はりつ椰子の蔭　同

○

夏野昏れて火を噴く淺間眉にあり　野狐禪
松のもとの瀧の不動や夏野來て　同
胡沙吹くや强行軍の日射病　同
行路病者を日射と診す老村醫　同
看護る妻のおろ〳〵聲や日射病　同